

坡者呼子鳥

分七寸三 コ ヨ 紙 表
分三寸五 テ タ

シ ナ 粹文本

叙じょ

てんまごめ
天に乙女の
踊子あれば。
地にまたお
豊とお富在
り。妙音を
ちつべんてん
以て弁天と
よびやうよく
呼。容色
によつて小
町と稱す。
きくあん
聽人暗に
魂を飛ばし。
みひこたちまち
見る人忽
忙然となん

叙じょ

とえし女は踊るを
お豊とお富音。如き御
舞と呼。空をよみ
小町と稱。聽人暗に魂を飛ばし

ぬ。今也兩
 婦の傳を述
 て。妓の所
 譯。戀路の
 手段。放蕩
 者の身の上
 はなし。臥猪
 庵が魂膽も
 花に嵐の
 兆となりけ
 る。よ町が
 享の酒宴に。
 入黒を滅す

見入る。忽ち私と云ふ。今也
 西帰。侍所。述く。妓の所
 譯。戀路の手段。放蕩者の
 花に嵐の兆となりける。よ町が
 享の酒宴に。入黒を滅す

貞女ていぢよの操みさば。
 是これを恨うらむ。
 豊とよが終始しじうを。
 どうらく肌はだに書かつとけ
 て。呼子鳥よこどり
 とは。なづ
 けはべり
 き。

安永六の
 とし酉の
 孟春

田にし
 金魚題

亭子ていしに流ながる。安やす入い黒くろを減へす
 貞女ていぢよ如ごとく深ふかく。是これや恨うらむ。豊とよが
 終始しじうを。どうらく肌はだに書かつとけ
 て。呼子鳥よこどりとは。なづけはべり
 き。
 安永六のとし酉の孟春
 田にし
 金魚題

目録

才一

高世使風俗

才二

おやまゝに
おやまゝに
おやまゝに

才三

おやまゝに
おやまゝに
おやまゝに

才四

おやまゝに
おやまゝに
おやまゝに

才五

おやまゝに
おやまゝに
おやまゝに

妓者呼子鳥

○廿一使風俗

西國先松種けさほくらに。新に枝おろゆね。
昨猪鹿とてさきさきう。さくら入、朱二客に。
露時雨とてく。維男中よりなごるを。むい
大くぬきめが。さきさき中よりさきさき。
小ぬきは。さきさき中よりさきさき。
さきさき。さきさき。さきさき。さきさき。

着て。はそからず太からぬ鯨鞘をおとしさし。大八寸の下駄をはき。人柄のよききやんしたて。左りつまにて。そともより。

〔露じう〕 先生おうちか。トずつとは入。〔ふすい〕 どふだろじうし。ねつからあわぬな。

〔ろじう〕 きくな。松葉屋に五日ながして歸りがけに。藏前の和菊が所で。今までめくつておりやした。〔ふすい〕 松葉

やはだれだな。〔ろじう〕 染之介さ。〔ふすい〕 初會か。〔ろッ。〕 どふだ。殺したか。

〔ろいん〕 や。指を切らせてきた斗りだ。〔ふ〕 そいつはかけるはイ。〔ろ〕 何おもしろ

くもねい。〔ふ〕 大ぶお袖がほころびた。どこでおたわむれの筋があつたナ。〔ろ〕 なに。こりやアかつらやに用があつて。

今よし町を通つたら。一文字屋のおせんめが。よびこむからちよつと寄つたら。今吉めがきてイヤアがつて。何んだか氣なしにくるヤアがつた。アイツも此

頃おきうの吉と色事だといふうはさだ。〔ふ〕 アノ馬道のおせんが。なせよし町へみせを出したか。〔ろッ。〕 あいつもおつつけ三十にならふが。まだうつくしい奴だよ。〔ふ〕 今吉めは此頃橋町へきたといつて。またよし町へこしたかな。〔ろ〕 やつぱり同朋町にゐるとさ。

又深川へ歸るといつけ。あいつもよく方へ巢をかへるやつじやねいか。〔ふ〕 あいつが馬道にゐる時分よんだま

まだ。やはりよし原にゐる方がよからふに。〔ろ〕 なによし原もいかぬのさ。あいつも深川にゐる時の元氣は今じやア

さになしさ。〔ふ〕 そふだらふ。しかしあいつがおもひ付とやらで。此橋町のげいしやどもが。きやうげんをするそ

ふだ。先度も三田のやしきとやらで。二ツてう／＼をしたげなが。おるいは濡髪。およねは放駒で。ふたりともあ

てたそふだ。〔ろ〕 ヤそれにつけて。おら

アおとよにきれぬをやつてしまつた。〔ふ〕 そりやなせ。〔ろ〕 此頃どこのやらうめにかころびやアがつたといふ事だ。それじやア。どふも外ぶんがわるい。〔ふ〕 なに。そりやうそだらう。よく聞いて見たがい。そしてそのきれぬの返事はなんといつてよこした。〔ろ〕 きくな。

とんだふといあめさ。きられる覺へはない。殺してしまへの。氣がちがつた

かのと。小むつかしいだら／＼。ぬよ。面倒だから半分もよんじやア見ねい。

それに聞きねい。こびき町のおとみめが。此頃はともならねい。せんどもおれがわづらつたら。客をやめて引

して。十四五日看病したが。まい晩三どつ／＼水をあびて。七日がうち鹽だちで。よるひる寐すについてゐたが。大

ていきついやつじやアねい。それにとんだきせんやつよ。ヤこんな事アゐだ。それといへば十日迄に二十兩ない

とならねい事があるが。五兩でもあて

をとりましやう。

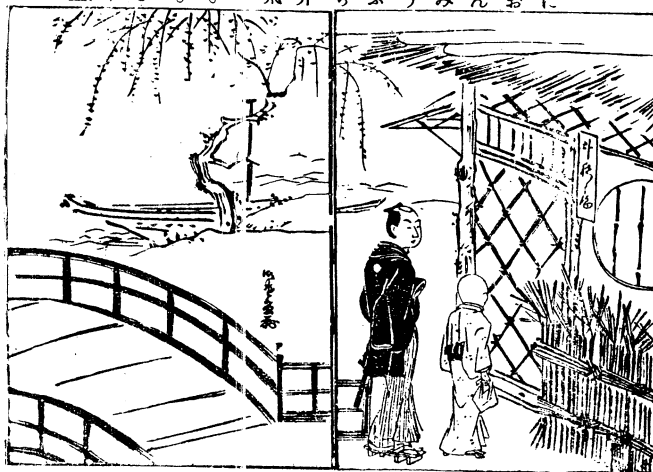
第二 おとよが嫉妬

ぬ。〔五〕あいつも永沙でこりはてたものを。何かすものだ。ぬしやきり山が息子と心やすいやねいか。〔六〕何あいつもいかぬよ。〔七〕ハテそりやアこまつたものさ。〔八〕けちな。できねい時は出来ねいものだ。此頃は富や無盡斗りつけてゐる。きゝねい。第六天のとみも十四五まい付ておいたが。今よつて見たが。花へでも出てゐねい。どふぞ一工面してみて下さい。こんなに困つた事アねい。トいひながら煙管たばこ入をしまひ立んとする。〔九〕もふおそい。泊らつしやいな。ちつと話したい事もあるから。〔一〇〕いんや。今夜はかへらにやちつとすまない事がありやす。トいひながら立歸る。上野の鐘がこん引／＼。

〔一〕こぞうサアねろよ。

小ぞう 旦那お床

濱の眞砂けいしやの中に。神田のおかね。中村お國。平松町の文字たみなんどは。そのわざのよきのみなれども。わざと心とやうしよくと。三ッ拍子そろふたる。その香も高き花たちばな。橘町になにしあふ。弁天おとよときこへしは。飛燕があいさやう貴妃が如。虞氏が風俗。西施がやうき。わが朝のそのむかし。小町。衣通。女三の宮。天津おとめのすがたにも。おさ／＼おとらぬ容色なれば。勿體なくも異名して。弁天おとよと名にたかし。されば町



方やしきをわかつた。くしのはを引座敷のかす／＼。猶いやましのおとよが心。露時雨が切れぬ氣にかゝり。なれども逢ふてこのうらみ。なんと云わふやこう云わふと。心みだるうきおもひ。此夜の座敷はとさらに。ぐんじ兵衛。一藤太。與三左衛門などといふ。すこびたる一座なりしが。中になまぎ。半か組。いやみぞろひの茶道の文南。酒たけなわに及べるおりから。文南 コレ／＼おとよ先生。きこうの手のほりものを。すことはいけんいたしたい。團伊、エわたしらが手にやア。そんなものはついぞ覺へがありやせぬ。何なまぎの手をまくつて見せる。中にくにして雪をあざむく。きこまやかなるはあまのしらたま。文南をつちの手を。ト見にかゝる。おとよは皆／＼。無理無體にまくりみれば。達筆に。二世も三世も露時雨女房。文南さてこそ。とんだ大きなほり物だ。

これをはる時アさぞ痛かつたらう。似た事もあるものだ。木挽町のおとみか手にも。やつぱり露時雨とはつてゐたが。よもやその露時雨ではあるまいさ。露時雨とはあるが。はやるかも知れない。藤太 おとみとはせんど木挽丁のはらでアノみた娘か。文南 それ／＼。あれはもと。佐々木幸八といふ。三味線引の娘だが。中ばしから芝までの。女げいしやのとう／＼だ。與三左衛門ろじうとは。かの評判の色男か。文南 さやうさ。ほんにくいはどいゝ男さ。第一鼻筋目のうち涼しく。唇うすく。いろ白く。まる顔でなし。瓜ざねでなし。ほんにうのけでついたはとも。言分なしのいろおとこさ。それに。いきななり斗りてありくから。江戸中で今助六と評判のたわらでござる。與三左衛門文南しはよくなんでも。穴を知つてゐ給ふとかな。文南 なんでもわたしが知

らぬ事は。大方ござりませぬ。お聞きなさいその露じうと。おとみかとんだいろどだね。指きり。かみ切り。血酒。日きせう。モウらんちき騒ぎといふ事さ。それだから露じうもぐつとのばりやアがつて。女房に引づりこむそのつもりにした所を。露じうがうしみの。おばとやらが。もつてのほか不承知だげな。それでおとみめが。此頃につけ込むといつてさわぐげな。

ト聞くよりおとよは髪逆立。身におぼへない無理いひかけて。おとみにみかへてきれぬか。だまされしか。残念なと。年ふれば石となるくすのきの床柱へ。ひばちの火ばし逆手ににぎり。エ、くちおしいと歯ざりなせば。くだんの火ばしはくすの木の石の柱へ八寸ばかりさしとをしける。その有様。見る人おもわずぞつとせしが。おとよはたちまち氣はき

やう亂。形相かはつてすつくと立。炭烈々とおこつたる。猛火の火ばちをふり上げて。そばにしやれぬる文南に。たまりもあらず投つてくれ。火ばちはあたまにかぶせられ。何かは知らずまつくらやみ。それ灰は雪に似て飛んで散亂し。人はまつ白になつて這て徘徊すといへり。いかに文南はさぞくるしくや思ふらん。これや茶番の火ばちのばけ物。兩國にはしき男也。一藤太は手練の早繩。おとよが小手を高手にかけ。駕へおしこみ橘町へ。そう／＼おくりかへしけり。それよりおとよ食事もたへて。二三日打ふせしが。二世の男を寐取られし。そのあだ人にそわせじと。いの心もわれながら。げにあさましやはづかしや。アラ物うしの時参り。戀とうらみとねたましと。三ツのかなわに蠟燭の。もゆるはむらも胸掛の。鏡にみちはてらせども。心は

くらき川ざしづたひ。水漂茫と物すごく。そらふく風もたどならぬ。多田の薬師にならびたる。秋葉の宮のしん／＼と。しげる一ト木の神木に。石をひらふてうつ釘の。おとちやう／＼とこだますれば。おもわす耳を打おふ。さすが女のあどなさも。戀にはつの一念ふ。一七夜がその間。木にうつくぎも人につうじ。おとみは毎夜物のけに。せめなやまさる苦痛のありさま。ふしきなりける事どもとかや。

第三 まつさきの狐

上がた店の息子雷義といへるできばし。臥猪庵におとづる。

「らいぎ」 どふじや先生。けさは早うおきなんした。ふすい コレへらいぎ子か。今お歸りがけたな。らい イヤ／＼内からわさ／＼來たのじや。ふ それにしてはとんだお早。シテ此頃のおたのしみは。

「らい」 氣をかねてげいこじやわい。それについてちと智慧を。からねばならぬわけといつば。ア／＼おとみめろが事じや。わしやゑらふはれたさかいに。なんとくどいておくれんか。ふ いつぞあつたら話して見やしやう。らい イヤ善は急げじや。ハチじきにやつてこましたい。ふ レチャアあんまり急なこつた。そふなら呼びにやりなさい。したがあいつもはやる奴だから。呼びにやつても居ればいゝが。ト云ながら。裏のぬづかいを呼んで。おとみを急によびにやる。らい 此廣いお江戸じやが。またおとみはどゑらいやつも。とんとこちやみあたらぬ。どふ思ふてもこちや女郎より。藝子がてつとりとするやうだ。ふ 私もげい者は好きだけれど。心いきは女郎より。もつと悪いもんでござります。それに客と一ツになつて。いかもの食ひをしてしやれる所をみると。

くつとあゝそがつきさる。らいいつぞ聞こふとおもふたが。女げい者はなせ客よりも船頭を大事にしをるな。ふ深川げいしやなぞと違つて。江戸げいしやは。せんとどうにくまれると。いろ／＼の。あたをする故の事さ。らい時におみつが兄めは。くつきりとしたよい男じやはい。ふ何。アリヤあいつが亭主さ。らいデモあにさん／＼といひくさつてじや。ふ藝者の兄さんは大かた亭主さ。トはなす中。おふサアくさきから待かねとみおきか来る。ふサアくさきから待かねく云つていた。こつちやアない。おとみにそれでも。大きに急いで参りやした。のふおさかさん。おさかアイあんまり急いできたいへ。いつそのぼせやすよ。それにかつさんが来て。又れいの芝居ばなしで。ほんにじれつとうござりやした。とみそれが。勝さんは氣のいゝ人さ。いつぞや向島でッレバさ

んが喧嘩の時も。三味せんや何かの世話をして。ほんによくきのつく人さ。ふコレをつちの話ばかりせすと。ちつとこつちへも。はなしを廻してくれろ。時にらいぎさん一ツのんで参りやせう。らいそれもよござんしよ。とみお坂さん。三味線をとつてきてくんな。ふさみせんはむだぞへ。それより酒にしや。とみ夕部あか坂のおやしきで。夜明るまでのんでいやした。ふ外の所でのんだ酒。何こつちで知るものか。なんでもけ。はのませにやアならぬ。ナアらいぎさん。らいいやであらふと今日は一つすごして下んせ。たのむぞへ。ふコレ、小僧畑ができた持ッてきや。小僧銭子をもつて。サアらいぎさん。こつぶにしやせう。これで一ツのんでまはすよ。らいコレなんにも着がないぞへ。ふさかなはさきで上やせう。梅ぼしでももつて來や。サアおとみぼうさしやせう。一ツのん

でらいぎさんへあげや。とみアノコレでかへ。ふ何そのやうに。きもをつぶす事はない。のむ所じやのむだらう。とみアノ。そんならたべやせう。さかおとみさん。またのみなすつたらあたるによ。ふ又おさかがそばから。それがうしのさしで口。ドレおれがつぎやせう。とつぐ。とみらいぎさん上やせう。とつぐ。おとみおきかへさす。さかわつちやねつからたべやせぬ。らいそれでも半分のまんせ。とみモッあの子はのむといつそねて斗り。いやすによ。ふコリヤア面白い。三味線ひかすといゝから。サア一ツのみや。さかそんなら半分たべやせう。トのんで臥猪へさす。ふチトおさへませう。さかコリヤむりだね。そんなららいぎさん。おあいをお頼み申やせう。らいお手もといひたい所じや。さかモウおがみやす。ふこりやアほんにあんまり着がない。小ぞう。角の酒やへいつ

て。ちよつと玉子をとつてきや。とみ
玉子をたべたら仕方がござりやすま
い。ふそつちやアしかたもあらふが。お
れが仕方があるまい。しかしおさかば
うがむとねるといふが。ちつとたの
しみだ。さか笑いな。いつもふ目が。とろ
／＼して來やしたよ。ふおきやアがれ。
らいなんと先生モおいでんか。とみ
こへいくのだへ。ふまつさきサ。とみ
まだ狐は出やすかね。さかアノ犬がおか
しいね。らいおさかばうおあいをたの
むから。先生へあげておさめとし給へ。
トのんでおれ。さか手酌にいたしやせう。
ふそれでも半分。さかコレごらうじや
せ。半分たべやす。ふトのんで先。ふ一ッう
けて。どふかおれ斗りのんであるやう
だ。らいまだおとみぼうはねつからあ
がらぬ。ふイ、エおとみぼうにやア話が
あるから。今日はのまされやせぬ。モウ
これでお納やせう。時に小僧舟はどう

だ。とみさつきから待つておりやす。
ふそんならいざさん。サア参りやせ
う。ふふねの。舟おとみさんお久し
うござりやす。とみたれかと思つたら
桑名屋の人だの。おばさんはおかはり
もねいかへ。ハンニせんのしはばまの
まんまだね。ふおとみさん。あんまりか
とみすぎるぞへ。とみ又わる口ばつ
かり。ちつと三味線を出しやしやう。とみ
さかおさか。八重がすみの哥を引程なくたの薬
師の前へくると。おとみ明かけし三味線をやめて。
俄にくるしむ。ふおとみ坊どうした。とみ
さか此内に舟さきぬれ。とみわつちやどふ
しやしたつたへ。もし向はたしか薬師
さんでね。アノとなりの森は。なにさ
んでござりやすへ。ふあれは秋葉さ。
とみアノ森をみると思はずぞつとしや
したが。ほんにこはい所だね。ふ何こ
わい所だらふ。春さきは。大體にぎやか
なこつちやない。ふトはなす中。舟はまつさき
へつく。皆々舟より上る。

らいまつ稻荷へまいつて來やう。ふお
前はお坂ほうをつれて。まいつて來な
さい。わたしやおとみぼうと話がある
から。はつたやに待ていやす。ふおさか
をつれ。稻荷へまいる。ふすいはおとみ。セシ
とみとはつたやの二かいへあがる。
見晴しだね。ふおとみよふがある。
こゝへきや。とみ笑いなながら。なんだへ
ばからしい。ふばからしい事でもなん
でもねい。話といふはアノらいざが事
だ。とみらいざさんがどふしやしたへ。
ふあいつがてもなく物れてゐるのだ。
口説いてくれろとうるさく頼む。それ
ゆへけふ此處へきたのだ。定ていやで
もあらふけれど。ハテはれた顔さへす
れば。てまへのためにもなる事だ。とみ
それだどつてばからしい。いやだと思
つてそんな事なるものでござりやす
か。そしてマアよくもつてもごらう
じやし。どうわたしが。ハテそんな事が

ておきや。とみ それでも。とんだあんまりきうだね。ふ ハテ今日あうといふこつちやアなし。口さきで例のちよ／＼らさ。とみ そんなら マアどふともしやせう。ふ よこそぞよ。と又こちらの座まはいて。いざし。一寸あそこへおいで。らい 行きはいかふが何んじやいの。ふ なんでもマア早くいきなさい。らいがうれしげに立ちぬいてゐる。らい なんのこつちやしらん。あそこへいねといふから來たのに。あほうらしい。とみ 何んじやナ。とみ さつきから段々。先生さんのおはなしきや、やしたが。ほんの事でそふおつしやいすかエ。わたしどもがやうなものを。そふおつしやるはづがございせぬ。おだましなんすでござりやしやう。らい だますとはあきないめうり。夷大黒かけ奉り。わしやとふから先生を。大ていたのんだこつちやないわい。定

めてお氣にやいるまいが。心の内で手をあわする。とみ こふ申しす上からは。こつちに嘘はござりやせぬが。おまへちやにしておくんなんすなへ。らい そふ思ふて下んす事なら。どんな心中でもしに見せませう。とみ ほんにかへ。とみ 拍子ひょうしに。さか おとみさんッ。お。とみよびやす。あの子は口のわるい子だから。こんな事がひよつとしれると。大體わるくいふこつちやござりやせぬ。とみ コレまだはなした事があるはい。とみ アレたれかきやすといふに。とみ まねけたつらつきにて師しなんぞいざしよりさしきへ出くる。とみ なんぞいざしきや。あんまりおそくなつたなら。内がわるくはないかへ。らい たとへわるくとも大事ないのさ。とみ 何それじやわるふござりやす。サアモウお歸りなされやし。らい モーッのんでいにませう。とみ なんぞさかなをもつてき給へ。とみ 手てをたふ。女ををよぶ。りも。れ

いの榮さか。田樂でんがく。大ひら茶碗ちやわんのりをいろ／＼もつてくる。らい いきはけしきとつて何もくわす。先生はむしやうにうちくらふ。らい いきはとおみがくかけの汁をとつて。これをうまそふにすい。舌打しやうだいのうへにをく。おとみはこれをつてくわす。らい おとみばうはなせしるをたべやらぬ。とみ わつちや。蟲氣むぎでしるはきらいさ。らい そんなら。此平このへいをくふてたも。と又わがくひかけのひらをとおみがひらとつかへる。おとみこれをさらにくわす。らい そのうちでなんなと一しな食ふて下され。とみ 皆みなわつちがきらいな物だよ。らい それともその松茸まつたけはくふだらう。とみ 何それなまのでなけりやアたべやせぬ。らい 先生せんせいにして手前は何かすきた。とみ わつちやなんでもみんなきらいさ。らい それでも芝居しやげはすきだらう。とみ いゝへ。それも猶なほきらいさ。らい そりやうそじやらふ。役やく者しやはたれが最負さいふじやへ。とみ お前に似てゐるアノ市山傳五郎いちやまでんごろうとやらが。ほんにしみ／＼すきやした。らい その傳五郎

といふは。かたき役か色事師か。とみいろ事師でござりやす。らいそれが。わしに似たといふのか。とみしがみ火鉢を。わらずにそのまゝ。らい何やらを。とみイ、エウリをニッにな。らいよい男かの。とみ外にやアござりやせぬ。らいどふぞ市山を見たいものだ。ヤ聞けば此頃橘町のげいしや共が。狂言をするそふだ。おれが此頃のこらすよんで。アノ白木やをさせてみたい。役割はさしづめ先生。ふハテおとみはおこま。お前は才三さ。らいわしがにも出来やうかの。ふ出来ねいでどふするものだ。なんでも髮結のまねをするの。おこまにだきつかれる斗りだものを。らいこりやアどふぞしてみたいものだ。筆太夫をよんではんまにやらかしてこまを。トはなす所へ。吉原より先生をむかひに來り。先生は此所に名の高きおこんとおるいを呼にやり。二人の藝者を引つれて吉原へいそぎゆく。らいぎはおとみ。おさかともにかのぼく水に舟を浮ぶ。又つれ引のびんがの聲。らいおとみば舟はほどなく柳ばしにつく。

うあしたすぐによびにやるぞよ。とみあしたもあさつてもおやしきへ参りやす。どふぞあさつてのそのあしたにしておくれなんし。らいそれはちつと待びさしいが。明後日はそんならきつとじや。舟を上り。駿河丁へかへりけり。おとみおさかは此舟にてすぐに木挽町へかゑる。

第四 おとみが手段
よ町が亭と聞へしは。前に蒼海漫々と。總房二州を見晴して。風色類まれ也けり。雷義は此日の約束なれば。墨水玉河の友を誘ひ。此所に傲遊なす。玉河呼にやつたは雷義子誰だ。らいおとみさ。玉アノ木挽丁のか。らいウ、夫さ。



鳥子呼者妓

なんじやかもや／＼。心持^{もち}がわるい。
あたいたいな。いつそ酒でものんでこ
まそう。^{ト茶碗を}とつて手じや。○おとこの茶
ぐにぐつと引かける。^{碗をとつて。}
【とみ】なんだへ。あんまりおゝきすぎや
す。わたしが半分^{はんぶん}すけて上^{うへ}げやせう。
とらゐがのみ^{はんぶん}しをとつて
て。おとこ半分^{はんぶん}ほどのさ。
りものめ。やらゐさん。さつきの事
を。ソレ聞^きて見^みなさんねい^か。【らい】コレ
おとみ。薬研^{やげん}堀^{ほり}のほうのとづけは。手
まへ心におばへあらふが。【とみ】アおる
いさんかへ。おふねさんかへ。【らい】インヤ
そんなものじやアない。【とみ】そんならお
たみさんか。お銀^{ぎん}さんか。おかねさん
か。おまきさんか。あの子たちよりほ
かに。とづけをされるものは。【らい】何
女^めじやない。男^おじやはい。手まへの
手にある男^おじや。【とみ】わつちが手に何
があるへ。【らい】何があるか。まくつて
みさんせ。【とみ】ばかしい。わつちや
アいやサ。【画】そんなら何か見せられぬ

事があるな。とみなる程はつた人もありやしたが。そりやとうに切れてしまつて。さつぱりとした身の上さ。ナアおさかさん。さかあのこなら。とんだふるいのさ。今じやそふいふ事はござりやせぬ。らいそんなら。こゝでけしてみや。とみすいぶんけしもないしやせうが。わつちひとりばかりしい。いやさ。さか人の身斗りあらためすと。らいざさん。おまへの手をおみせなんし。らいさアみせませう。トもる肌ぬいて兩手を胸に毛のあるばかりにて。ほり物などさらになし。らいなんとどぶじや。あるまいが。きれいな物であらふがの。とみそんならお前。わつちが名をほつてさへおくんなんすと。わつちが手のも消しんしやう。らいおれがほつたら。こなんは消すか。幾つてもほりたい物じや。とみおよしなんし。わつちが名を。ほりなまつたら。外聞が悪ふござんせう。らいそんな事をいわんすなら。

今じきにほりませう。国こりやアおもしろかろう。ドレわたしがほつてやりませう。トほりをとりよせ。ほりにかゝる。とおみ其針をとつておりにする。とみもふいゝかげんに。じやうだんをなさりやし。しまいにやア困りなんしやうぞへ。らいそんならてまへ。けす氣がないの。とみ随分けしもませうけれど。そふはなりやせん。こんどの事さ。國らいざさん。それじやアおまへ。すんめいぞへ。らいコレおとみ。どふあつてもそんならいやか。とみアイいやでござんす。ト雷きむつとする。らいそんなら消さすとまゝにせうは。どふぞ手なを見せさつしやい。とみみせる事なをいやす。らいそんなら見すとをきませう。トてれる所へ。女ばう。さかなをもちきたり。女ばうなんだかお前さん方は。くせつ斗りいつておいでなされやす。ちつと御酒になされませぬか。おとみさん。ちつと引なトおとみ三味線をとりよせて。さかもりいな。のうち。うたを引。女房はおくの間へふと

んを持枕を置て。女おとみさん。ちよつとお目にかりやせう。トおとみをよんで。こゝにちつといてくれな。トざしきへ行。らいが背中をついて。らいおとみ。なんだ。とみけふは何行。とおもつてか。だいふ。いろ／＼の事をおつしやいすね。らいなんと思つてもゐやせんけれど。聞けばこなんは色事があるそふな。そんなら今迄のは皆うそじやの。だましたのじやな。とみなせだへ。らいハテほり物もけすまいし。わしにもほらさぬからは。これうらみじやぞや。おとみさん。あるならあるとかくさすと。なせにいふてたもらぬぞ。さりととはつたらぬ。むごい仕方じや。ト涙ぐむ。とみそれはどにまで。思つてくれなんす上からは。何マアおかしくし申やしやう。わけをお咄し申いすでばつかりしいした。また消されぬといふわけは。此春わたしがはしかの時。

いつそつまらぬ事斗ござんして。その人のまへから。甘雨かりやした。それをかへしてしまわぬうちは。どふもけすにもけされやせぬ。あそこでその譯をはなしたくても。みんなが聞いてゐなさるまへ。わるく思つておくんねんすな。いそふいふわけとは露しらすに。むり斗いひやした。そのかね私がかすさかいで。ほりもの消して金かへし。さつばりときれさんせ。い甘雨おとみにわす。とみ御しん切はわすれやせぬ。金さへかへせばどう成とも。いサア金かしたうへからは。ほり物をけしたも。トのつびきせすもぐさせとりよせ。手をとらまへてけすほり物。かゝるところへおさかきたり。さか御膳が出やした。あがつてまた。ゆつくりとお咄なんし。い今いくといふてたも。トすゆるもぐさのやけ入るも。いうがためとこらゆるおとみ。一間の河が高座。玉コレゝあんまり幕がながい。切落して手をたゞく。飯でもくつ

て腹へちつと。身を入てはなすがいい。何かゞさめる。早來給へ。とみそんならマアいつてから。後にまたはなしやせう。とみおとみは向さしきへ。いうらいいぎさ。いどふだわかつたかな。い大わかり。玉それでもほりものをけさねば。すめぬぞ。いそれもわかつたて。いわかつたと斗りいつても。すまぬものだ。いおとみ。その手をださつしやいな。とみ何だへばからしい。わつちやアしりやせぬ。玉それみたか。何消すものだ。トゆふゆへに。いいざは見せたがり。色ね。いいんや。けしたよ。い何けした。おきやアがれ。こりやアおかしい。きついうそだぞ。おとみさんどふだ。消す氣は。さらになし地の重箱だらうが。いおとみうへ知れやうかと。此事を二人へ。とみしげふぬふりしてらいいをじらう。い男の名だ物を。めつたに消しちやアなりやせぬよ。玉消されまい。尤な

事だ。しかしそのやうに。なんば思つてゐなさつても。此頃露じうは立チかへつて。毎晩おとよが看病するげな。その證據には此ごろは。おまへのほうへは來めいがの。いおとよりおとみはとみそりやアアほんの事かへ。玉ほんの事くらいか。藥のせわや何かをして。毎晩ねずについて居るげな。とみどふして知つておいでなんす。それがまあほんのこつちやア。いほんのこつちやどふするつもりじや。とみおとよさんがさぞ。嬉しうござんせふといふ事さ。さかそれをきいちやアおとみさん。そふしちやアいられまいがな。とみなせへ。いかくしなさんな。よく知つてる。何ンでもほり物をけさぬからは。四も五もいらないうががアだ。いいざさん。むだゞぞへ。おもひきつてしもふがいに。いほり物さへ消したなら。言分はあるまいがの。玉そりやア

またしれた事さ。圖どふしてあの子が消すものか。国出してみせてくりや。とみイ、エわつちやアイやさ。国これを消せばとんだ事だ。らいざさんちやアけされまいさ。とみいふ故にらいぎはよく／＼氣をじらし。おとみがそばへ立よ。国これおとみ。みせてくれねばわたしがたゝぬ。とみエ、もふわつちやアイやだといふのに。とみいひながらおとみを引とめて。いろ／＼手を出させんとす。おとみはをみせまいと。二階の上り口まで逃げてゆく。あとより追つかけ狂ふはづみに。国らいぎは二階をふみはづしまつたかきまにすてんとうんとばかりに氣ぜつなす。腰をぬく。茶の夫婦は大きにおどろき。醫者などよんで氣つけをあて。やう／＼いきをふきかへせば、無理無體に病にのせて。駿河町へかへせば、氣の毒ながらおかしかりき。

第五 生たるおとよ死たる

おとみを惱

露時雨おとみがかよふかみ。ものよりよければ先生より。たがいにつうろなしけるが。かの先生はまつさき

より。よし原に大ながし。四五日宿へ歸らねど。かゝる事とはおとみはしらす。ろじう方へおくるぬも。先生かたにとゞこほり。ろじうがおとみへやるぬも。先生への手紙かと。留主の丁稚がとゞけねば。たがいにからむるいぶかしさ。惡事千里はふせぎがたく。おとみとらいぎが色事と。しやくり手あれば露じうはせきこみ。此ごろやる四五どのぬも。用事あるのに返事もしをらず。不思議とおもひゐたりしが。又もや外へくされあい。人もしつたる此ろじうが。つらをけがすか性惡め。そふいふ奴とは知らずして。おとよにまで切れた事。はやたれ知らぬものもなきに。人に笑せはちかす。思へばにくきアノ女。どうしてくれうざしきよたかと。兩國の委しまより。おとみにはかによぶ使に。もし座敷へ出お

つたら。いつた先まできいてこいと。せいてやる人はやたちかゑり。おとみはよ町に。客はらいぎと。きくよりろじうは心ならず。じきによ町へふみこんで。ことの實をたゞさんと。いそいでわたる。きやうばしを。二人づれで高ばなし。

国アおとみめは。なんとほんにほりものを消したらうかの。国ハテか、アめが床をまわして。らいぎとおとみを呼びやアがつて。うすぐらい一間のかたすみ。屏風をぐつとひきまわし。物おとたゑてしめやかに。ほりものを消すもぐさの匂ひ。なんでもあいつは。きまつたに違ひはないがその罰で。ちわがこうじて二階から。ころがにおちたアノざまは。おかしかつたじやアなかつたか。

はなしきくより露じうはせきこみ。歩むともなく銀座町。右へまわれば

弓町の。つる打やが向かど。おとみはよ町を立出しが。らいぎがつれのしやくりしを。女心にまど心へ。これほど思ふ心にかへ。またもとよに立かへる。ろじうが惡性うらめしく。顔でしらする心のしつと。露時雨をみれどつんとして。物をもいわす行する。

ろじう コレ待ておとみ。とぞつてみせる身。
思つて。あいそのつきたそのつらア。うぬなんだ。とみ エ、こつちであいそがつきたはな。いけあつかましい。そりやわつちにいふのじやあるまい。おとみさんとの間違かへ。とこいつは云わせればとほうもねい。うなアそれがおれが前で。ぬかされる事か。それに今きけば。うぬほり物まで消しやがつたな。とみ 消さないでとふするものだな。嘘じやアねい。これみてくん。ト消したばかり物を腹

立まされにまくつてみせる。本より一徹短慮のろじう。おとみがもとよりひつゝかみ。水の刃ぬきはなし。わき腹から腹元まで。ぐつとつつこむ一とふぐり。おとみは苦しき息をつき。

エ、うらめしいろじうさん。きけば此頃おとよさんに。又たちかへる性惡の。邪魔になる故殺すのか。死ぬる命はおしまねど。だまされたが口おしい。そふいふむごい心もしらず。明暮こがる胸のうち。先生さんのはなしには。にわかにお前の身のうへも。金のいる事があつて。苦勞さんすと聞た故。雷義さんをだましてから。甘雨かりとつた。その義理づめにはり物まで。けすもお前に心ン中の。心も身をもけがさねど。女の身にはづかしいおそろしいだまし事。その罰ゆへに此死にやう。ぬしにまかせた此命。お手にかゝつてしぬ身は。うれしいといひながら。一人の母のゆく末の。頼りに思ふそのお前が。心がかはつて殺すとは。おまへは鬼か露じうさん。たゞうらめしいはお

とよさん。心にかゝるはひとりの母上。わたしが死んだそのあとで。たれを力にうき月日。泣き死に、死になんす。その介抱の死に水を。取るこのわたしがさきだつて。獄きをかける不孝のつみ。ゆるさせ給へ母うへ様と。南無あみだ仏も四句八句。しどうをきいて露時雨はおどろき。そふとはしらすはやまつたか。くちおしや殘念や。人のしやくりと間違ひとで。むざんにそなたをさし殺し。何めんばくにながらやう。アレ町内イは十え二十へ。のがれたなき此場のしぎ。死出三津をもとなわんと。おとみをへらぬく双にて。腹抱き合。おとみはにつこと打笑ふ。かほも春の花の色。二人の春もまたすして。散りてむなしく成にけり。おとよはかくと聞よりも。前後正體なかりしが。やう／＼と心づき。二世まで

ちかふ戀中を。寐^ねとしりのみか心^{こころ}中
とは。皆^{みな}おとみめがなす仕業^{しわざ}。口をしや
怨^{うら}めしやと。ふししづみたるやまふの
床。おとみが母は悲歎^{かなしみ}のなみだ。氣も
さかのぼつて狂^{くる}亂^{らん}し。小石^{せうせき}をひろふて
袂^{たもと}にあつめ。相引^{あひひ}橋^{はし}よりまつさかしま
に。その蕨^{わづ}屑^{くず}と成^{なり}にけり。おさかは
しんみの兄弟^{けいだい}に。別^{わか}れしよりも猶^{なほ}かな
しく。おとみが死骸^{しかい}をほうむりて。な
みだのしるし七卒塔婆^{しちそくだふ}。七日^{なぬか}の
ひともらひも。こゝに一^{いっ}つの怪談^{かいだん}あり。
時丑^{ときしう}みつる頃^{ころ}おいに。夜な／＼もゆる
おとみが墓^{はか}はら。陰火^{いんか}の中にわたる泣^{なみだ}
聲^{こゑ}。衆僧^{しゆそう}これをしづめんと。あらゆる
法^{ほふ}を修^{しゆ}しけれど。さらに此^{こゝ}とやまざ
りし。此寺^{こゝ}の境内^{きんない}に。世^よをのがれ住^{すま}
浪人^{らうじん}あり。かのなき聲^{こゑ}のいぶかしく。
仔細^{しじゆ}ぞあらんとうかゞへば。風扇^{ふうせん}々と
物^{もの}すごく。めさすもしらぬ眞^{まこと}の闇^{くら}。手ま
りほどなる一^{いっ}つの丸^{まる}き火^か。橘町^{たちばなまち}のそら

よりとび來^きて。おとみが塚^{つか}におちると
見^みへしが。陰火^{いんか}たちまちもへあがる。
中^{なかつ}におとみがその姿^{すがた}。かげのどくにあ
られて。さも切^きつたる聲^{こゑ}に。あ
ら恐^{おそ}ろしのおとよさん。ゆるし給^{たま}へゆ
るして。おめさくるしみ泣^{なみだ}きさげぶ。
浪人^{らうじん}とくと見^みすまして。來國^{らいこく}光^{みつ}を引^ひ
こぬき。眞向^{まっこう}にさしかざして。おとみ
をなやます心^{こころ}火^かの玉^{たま}を。まつ二^{ふた}つにき
りくだけば。右左^{みぎひだり}へばつとぞ消^きへにけ
り。青^{あお}きはのはももへやみて。おとみと
見えし^{みえし}は。六角^{むかく}の。一^{いっ}つ木の卒塔婆^{そくだふ}と
成^{なり}にけり。怪力亂神^{かいりくらんじん}はかたらじと。浪人^{らうじん}
ふかくもこれを隠^{かく}し。かつて此^{こゝ}さたせ
ざりしとや。此夜^{こゝ}はおとよもと別^{わか}け
て。ものくるわしくみへけるが。もたへ
つかれし苦惱^{くなん}のひまか。正體^{せいだい}もなく打
ふしぬ。ともにつかれし看病^{かんびやう}の。人もい
ねむる牛^{うし}の刻^{とき}。くさ木^{くさき}もしづむをりか
らに。おとよがわつと叫^{こゑ}びし一^{いっ}つ聲^{こゑ}。

みな／＼驚^{おどろ}き目をさます。心ならずも
母親^{おはは}は。コレおとよ。うなされてか。氣^きな
つきやいのとゆりおこせど。なんのい
らへもあらいぶ／＼しく。いだき起^{おこ}せ
ば息^{いき}たへて。氷^{こおり}のどくひへわたる。母
はおとよが耳^{みみ}に口^{くち}。おとよいソフと呼^よび
いくれど。はるかに隔^{へだ}つ婆娑^{はさ}冥途^{めいどう}。二十
の坂^{さか}もまだこへで。無常^{むじやう}の秋^{あき}の夕^{ゆふ}しぐ
れ。知るも知らぬもきつたへ。しほ
らぬ袖^{そで}ぞなかりけり。されどおとよが
一念^{いっぴん}の。願火^{がんか}となつておとみが墓^{はか}を。惱^{なや}
ませしその證據^{しやうこ}は。彼浪人^{かれらうじん}の一刀^{いっとう}に。
くだんの願火^{がんか}をきりける時に。アット一
こへさけびしが。そのまゝおとよが息^{いき}
たへしも。不思議^{ふしぎ}の中^{なかつ}の。不思議^{ふしぎ}といふ
べし。もとより死^ししたる執念^{しつねん}の。生^いき
たる人^{ひと}をなやませし。類^{るい}は古今^{ここん}におほ
けれど。生^いきたる人^{ひと}の一念^{いっぴん}の。死^ししたる
人^{ひと}をなやませし。前代^{ぜんだい}未聞^{みぶん}のありさま
を。春^{はる}の眠^ねに夢^{ゆめ}ければ。そのあらまし

をしるし侍る。

安永六ツの春

めでたき月

妓者呼子鳥終